ハイスクール ウォッチング

ここ2、3年県内の公立高校の共学化が一段とすすんでいます。21世紀を担う若者は、男女平等をどこまで意識しているのか。

女子のみの県立静岡城北高校、女子校へ男子が入学した県立富士宮東高校、男子が多かった工業高校へ女子が入学した県立掛川工業高校をウォッチングしてみました。

スポーツのチームがつくれるくらい女子が入ってくれるといいな！

□県立掛川工業高校

平成4年にはじめて女子生徒1人が卒業。今年度は、一年生11人、二年生7人と女子生徒がかなり少ない学校です。名簿もカリキュラムも混合です。工業高校なので実習室が6棟もあり、さまざまな最先端の工業機械やコンピュータが並び、工場の中を歩いているような感じがしました。

大場教頭は、男女の特性について

「女子生徒はがまん強く、こつこつ勉強するので成績は優秀です。男子生徒は、物事の見方がいろいろな角度からみられるので、自分で工夫して応用がきくんです」と語ってくれました。

―入学の動機は？

「設備システム科は県内に一つしかないのでやってみたかった」

「自分の家が電気店で、親の勧めもあったので」

「コンピュータ事務を将来やりたい」

「将来、工業関係について女性の視点を生かしてみたい」

さすがに、自分の将来を見つめ、やりたいことをはっきり決めて、入学しています。

―学校生活で男子と女子の違いについて？

「男子は小さい時から機械をいじっていて、名前を知っているけれど、女子ははじめてで、と惑うことが多い」

「女子の数が少ないと、かえって固まってしまって、男子と話すことが少ないみたい」

「もっと大勢女子が入ってくれれば、駅伝のチームもできるし、いろんな事ができるんだよ」

―将来、子供を産んでも、職業を持ち続けたいと思う？

子育てと仕事を両立することが難しい現実を良く知っているのでしょうか、継続派より中断派が多かったのが印象的でした。

□県立富士宮東高校

2年前から、伝統ある女子高校へ男子生徒が入学。ユニークな教育方針を打ち出し、好評を得ています。

◇家庭科男女共修編

郷土の文化を伝承することの大切さと、食生活を見直すことを学ぶために、そばづくりに取り組みました。三村教頭の指導で210坪の畑を借りて、種まきから刈り入れ、粉にひくまで生徒たち自身で作業しました。その中で、男女がよく分担し、協力しており、男女共働の家庭生活の一端を学ぶ良い教材になっています。

「男子に家庭科を教えるには、内容を充実させて、理論的に説明すると、非常によく反応してくれます。料理実習以外にも、介護実習や幼児保育など、これから必要性の高まる実習に重点をおいて教えていく予定です」

と家庭科担当の中野教諭が語ってくれました。生徒たちも楽しみにしているようです。

◇野球部編

三村教頭は、甲子園出場経験のある野球大好き熱血先生。三人の野球部員は、三村教頭にひかれて入学。井出さんは、スコアをつけて、野球部の一員になりたいという願いからマネージャーをやっています。しかし、洗濯、片づけ等雑用は、部員が自分自身でやることが先生の指導方針。女子でも野球をしたい生徒は、力があれば一緒にやれば良いし、体育の授業の中で、これからは男女混合でできるものは、どんどん取り入れていく予定だそうです。

女子生徒と男子生徒がお互いのパワーをひき出しあえれば、真の共学のプラス面がアップすることになると思います。

みんなのびのび、先生との信頼関係がみえてきます。

活動の中で育つ自立心が自信につながっていきます。

□県立静岡城北高校

創立90年の歴史をもつ女子高校。明るい玄関ホールから、ゆとりある校舎内にはさまざまな作品が展示されていて、芸術分野にも力を入れていることがわかります。また、立派な同窓会館がすぐ隣にあり、在校生にも利用されているそうです。

女子高校について、田中教諭は、

「この学校は、行事が多く、企画から運営まで生徒が中心です。そういった活動の中で学ぶことがたくさんあり、共学では得がたい活躍の場を得て成長し、胸を張って、自信をもって卒業していけることだと思います。ただ、容姿や勉強だけでなく、一緒に仕事をして、はじめて分かる相手の人間性みたいなもの、ありますよね。それを異性に関して学校で知ることができないという面もあります」

と語ってくれました。

—入学の動機は?

鈴木あゆみさん

英語が好きで、この学校の国際教養コースに進みたかった。

—学校生活の中で良かったことは?

中学の時は、消極的だったんですが、生徒会活動で体育委員長を引き受けた経験から、自信を持ちました。

体育祭の運営が中心でした。大変だったけれどやりがいがありました。

女子だけでも、やればできるんだなと思いました。とても良い機会を与えてもらえました。

—将来は?

英語を生かした職業につき、結婚をしても続けていきたいと思います。

大学に入っても、今の気持ちを大切に前向きに頑張ってほしいと思います。

ちょっとお邪魔します！
メンズ・サタデーセミナー

女性をまじえて討論会

女性総合センター「あざれあ」で昨秋開講したメンズ・サタデーセミナー。女性の社会参加や生き方の変化に理解を示す男性を啓発する講座として、昨年の9月から12月まで、土曜日の午後、約50人の男性が受講しました。

11月20日、これまで4回の講演や料理実習などを体験してきた、20代から60代の受講性40人が、初めて女性たちをまじえて「男と女の家族観」について意見交換をしました。女性たちを目の前にして、男性たちがどこまで自分の考えを主張できるか――私たち編集員3人も参加しました。

はじめは小グループに分かれ、「家事の役割分担について」「老後の親の面倒をどのようにみていくか」「上手な三世代同居とは」等テーマごとに話し合いました。講師は、静岡大学教育学部助教授の馬居政幸さん。初対面同志、最初は緊張しつつも、「同居していた妻と母の間がまずくなり、別居に踏み切ったが、あの時、もっと自分に何かできなかっただろうか」「親が病気になった時、妻に仕事をやめてほしいのだが…」等、実生活をふまえての意見交換に、次第に熱が入ってきました。

そしてグループ発表。若い男性が「嫁が」「主人が」を多発すると、「『嫁』とか『主人』という言葉は、対等な夫婦関係を築く上では禁句ですよ」と馬居さんからクギを刺される一幕も。「専業主婦は、自分の時間がたくさんあると言うけれど、いつ帰るともわからない夫をダラダラ待つという拘束された時間でしかない。せめて、帰る時刻の連絡が欲しい」という女性の声には、男性群も「なるほど」とうなずく。夫婦の間では、不平不満として聞き流してしまいがちな小さな主張も、一個人として男女が向きあって話し合うと、ストレートに胸に響くようでした。

●衣食住に関して完全に自立すること
●子供を自立させること
これが、夫婦が「共に生きる」条件

静岡大学助教授　馬居　政幸さん

日本の社会は、長い間 ㊋－㊛－㊑と縦の関係でしたが、人生80年ともなれば、子供は夫婦の人生のある一時期しか存在しません。夫婦二人きりの時間が父と母ではなく、夫と妻、あるいは人生のパートナーとして「共に生きる」ための新しい関係をつくっていかなければなりません。

男が職場にいる間、女のライフスタイルは、第一次専業主婦(＝専業主婦)、第二次兼業主婦(＝フルタイムで働く人)、第三次兼業主婦(＝パートで働く人)の3つの生活形態に分類できます。どの場合も、男は自分の職場の方を向いています。つまり、日本には、「夫婦が共に何かをする」という文化がないのです。それゆえ、結婚後何十年か経って、夫婦二人きりになった時、夫婦が向きあって「共に生きる」ということが、いかに難しいか、容易に推測できるでしょう。

「共に生きる」ための第一条件は、「自分の相棒を自立させる」こと。衣食住に関しては、すべて自分でできるようにすることが、第一ステップ、家事は、二人で生きていくための共同作業なのです。

第二の条件は、「子供を自立させる」こと。子供に身のまわりのことを、自分でやらせるためには、父親が家事をする姿を見せなければなりません。母親が何もかも世話をやく子供は、将来、女性を「身辺の世話をしてくれる人」としか見なくなります。〝冬彦さん〟ですね。

あとは、会話の技術を磨くこと。自分の意見を主張しつつ、相手の言い分も聞く。対等な会話は、自由で、生き生きした夫婦関係を生むキーポイントになるでしょう。

メンズ・サタデー 突撃インタビュー

―メンサタ受講の動機は

「会社以外のネットワーク作りに。会社人間で終わりたくないですからね」（40代・会社員）

「女房といつまでも仲良く暮らすヒントをつかみに。それと、職場の女性とうまく付きあうために、女性の考え方を知りたいと思って参加しました」（40代・会社員）

「定年後、粗大ゴミになりたくないので」（50代・会社員）

「婦人問題って何なんだか、もっと総合的に理解したくて来ました」（60代・無職）

「これからの女性の意識を知り、今後男がいかにサポートしていくかを考えたいと思って」（40代・幼稚園理事長）

―メンサタに参加することについて、周囲の反応はどうですか。

「家族は大賛成してくれました。講義内容は家族に披露しています。また機会あることに、地域での話題にしています」（60代・会社員）

「女房にだけ参加を話しています。女房はセミナーの内容を毎回聞きたがり、理解も深いですよ」（40代・会社員）

「会社に参加報告書を提出しました。部下たちは『よく好きでやってるワ！』と冷ややかな目。部長だけが『頑張って』と言ってくれました」（40代・会社員）

「女性は『へエ～』と言い、男性は『え～っ』と言いましたね」（40代・中学教員）

「会社の同僚には話してない。家族は『家の中でゴロゴロしてるよりはいいんじゃない』という感じかな」（40代・会社員）

「男は『追求すればするほど壁にぶつかるだろう』と、女は『来年からどのように考えが発展するか楽しみ』と言ってます」（40代・幼稚園理事長）

―今日の女性との討論会の感想は？

「意欲的な女性たちの意見に刺激を受けました。それにしても、肩書きなしに一個人として女房以外の女性と討論するなんて学生の時以来かな。やればできる！」（40代・会社員）

「これから親と同居する予定なので、嫁と姑の厳しい体験談を聞けてとても有意義でした。男女間の差別が確実に縮まってきていると実感しました」（30代・設計技師）

「女性が専門用語を使って肉迫してくるので、対応に苦しみました。しかし、大変楽しかった。やはり、対話は人の輪を広げると実感しました」（60代・生涯大学学生）

「女性たちは、自分の意見にこだわりすぎ。私は地域活動に積極的に参加してますが、普通の男達は感心はしても、心の底から、賛成、尊敬はしてくれないのが現状です。しかし、今回のセミナーで、改めて自分が歩んでいる道は正しいと確信しました」（40代・会社員）

「どの女性も、『生まれ変わってもまた女性に』と言うのを聞いて、大きな時代の変化を感じました。男はボヤボヤしていると、会社にエネルギーを吸いつくされ、ひいては妻にも見放され、捨てられていくのではないかなあ」（40代・教員）

「男は最初から妻や女性を家政婦視してきたわけではないんです。結果としてそうなってしまったということを、相互理解することが大切。女性は女性なりに社会を見つめているのですね」（40代・幼稚園理事長）

「女性が外に出ることがいかに大変か、また夫の協力がいかに必要かを痛感しました。妻に対して少し反省して接します」（50代・会社員）

「男と女が、年齢、地域・職業の枠を超えて話し合うことこそ、生涯学習の姿だと思い、大変楽しかったです。時間が足りなかったのが残念でした」（40代・営業所長）

◇　◇

取材を終えて

皆さん、お疲れさまでした。私たち女性にとっても、男性の本音に触れることのできた今回のセミナーは、とても貴重な体験になりました。男性群の真摯な態度にも感動しました。

男性と女性が、一個人として向き合い、率直に対話することが、相手を理解する上での何よりの近道であることを、改めて感じました。これからも、こうした対話の機会を意識的にもち、積み重ねることが、男女が共に生きる未来への手がかりになるでしょう。

「やればできる」―これが、今回の討論会の正直な感想です。

メンズ・サタデーセミナー受講生のような男性が、ますます増えることを期待したいと思います。

街角ズームアップ

富士女性プラン（富士市）――女と男いっしょに社会を築きます

平成5年11月、富士市に「富士女性プラン」―女と男いっしょに社会を築きます―が策定されました。

これは、男性、女性が力をあわせ、お互いの個性や能力を発揮し生き生きと暮らすことのできる社会を目指した総合的な施策の推進を図ることを目的としています。県内市町村では浜松市に次いで4番目の策定となりました。

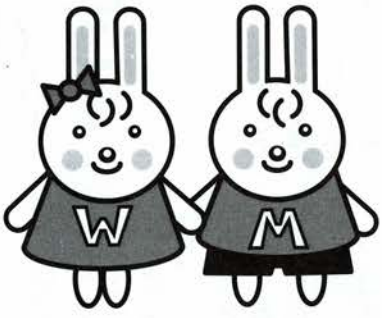
これまでに、1985年に「ふじ21世紀プラン（第三次富士市総合計画）」を策定し、その中で、婦人の社会的地位向上のための施策を位置づけ、1988年には、女性の活動拠点として保健婦人センターを設置し、男女平等意識に立ったさまざまな事業を展開してきました。

女性市議の働きかけをきっかけに、1992年から計画策定に向けての懇話会検討委員会、市職員を中心としたワーキンググループ会議等が開催され、審議が進められてきました。

このプランは、「個人の尊重と男女平等」「男女の自立とあらゆる分野への共同参画」「男女が共に生きる社会の実現」を基本理念としています。中でも市民が、安心して暮らすことができ、愛着を感じ、誇りを持てるまち〝富士市〟となるよう男女が平等の立場で、まちづくりに参加し、信頼に基づく社会の実現をめざしているのが特徴です。

3月2日には、弁護士の福島瑞穂さんを招き女性行動計画策定記念講演会を開催しました。約650人の参加者があり、男性も含め、多くの人が熱心に聴講していました。

新年度から西暦2000年までを計画期間とし、実施計画の立案に着手する予定で、庁内で検討を重ね、市民代表による推進会議へとつなげていく予定です。



エイズは人権の問題（藤枝北高校保健委員会）

昨年、8月19日の関東甲信越静学校保健大会で、藤枝北高校の保健委員会は、6年かけたエイズ研究の成果を発表し、多くの先生方に好評を得ました。

研究のきっかけは、6年前に掲載されたエイズの新聞記事。

はじめは、生徒たちの意識の中に、差別や偏見があり、ビデオや書物の学習を通して「自分やまわりの人が感染したら」という気持ちでたくさんの話し合いの時間を持ちました。

そのため、性にかかわる問題も委員同志で率直に話し合えるようになり、研究を通じて、「エイズは怖い病気」というばく然とした先入観を脱皮し、「感染者への偏見、差別のない社会の実現に向け、私たちは何をすべきか」という問題意識を持つまでに知識を深めることができました。

「私たちは、エイズ問題への関心が高く理解しようとしている。先生も正しい理解と勉強に真正面から取り組んでほしい」

「保健室以外で、性やエイズについて率直に話すことは抵抗があります」

「家庭で話しをすると父親が、『タバコを買ってくる』と言って、逃げていったりするんです」

と語ってくれ、委員会のメンバーの関心の高さが感じられました。

金崎教諭は、

「エイズ問題をきっかけに人権問題へ関心を高めてくれれば」

と話してくれました。

11月の文化祭では「エイズ検査に行こう」という劇を行い、男子生徒も積極的に参加。生徒以外の人たちも見にきてくれ、多くの人にエイズを考えてもらうきっかけが作れたようです。

委員会のメンバーは、エイズ患者への偏見、差別という私たちの「心の問題」として関心が高まるようになってもらえばと期待をふくらませていました。